米子医誌 J Yonago Med Ass 55, 142-150, 2004

親となる意識の構造とその影響要因に関する調査研究

鳥取大学医学部保健学科　母性・小児家族看護学講座

佐々木くみ子，植田　彩，鈴木康江，前田隆子，片山理恵

Does shaping parental consciousness relate to concern for the unborn child and marital relationship during pregnancy ?

Kumiko SASAKI, Aya UEDA, Yasue SUZUKI, Takako MAEDA and Rie KATAYAMA

Department of Maternal & Pediatric Family Nursing, School of Health Science, Faculty of Medicine, Tottori University

ABSTRACT

The purpose of this study was to clarify shaping of parental consciousness in terms of parents' personalities, their relationship with each other and their concern for the unborn child. The subjects were 113 parent couples who ware expecting their first child. As the results, parental consciousness involved 4 factors –confidence, restriction/burden, pleasure/hope and anxiety about the unborn child's health. For husbands and wives, asides from positive parental consciousness, mature personalities influenced good relationships and it was important for the husband to show interest in the unborn child. On the other hand, communication between the husband and wife was found to be a highly valuable factor in the development of good parental consciousness in the wife. Mutual support of mental health between the wife and husband can be helpful in creating positive parental consciousness during pregnancy.
(Accepted on January 8, 2004)

Key words : concern for the unborn child, marital relationship, parental consciousness, pregnancy

はじめに

育児不安や育児困難感，乳幼児虐待などの親の養育力に関する問題は，今日，社会的課題である．従来，人が「親になること」は成人として当然のこととして不問にされてきた発達課題であったが，顕在化する養育上の問題から[1]，主に母性心理学や母性看護学分野において，親としての発達過程に視点をおいた研究[2-4]がなされるようになってきた．しかし，母親自身をテーマとした研究に比べると，日本では父親に焦点をあてたものは少ない[5]．

養育期のペアレンティング（parenting）について，Belsky[6]はその規定因子を親側の要因（親

Presented by Medical*Online

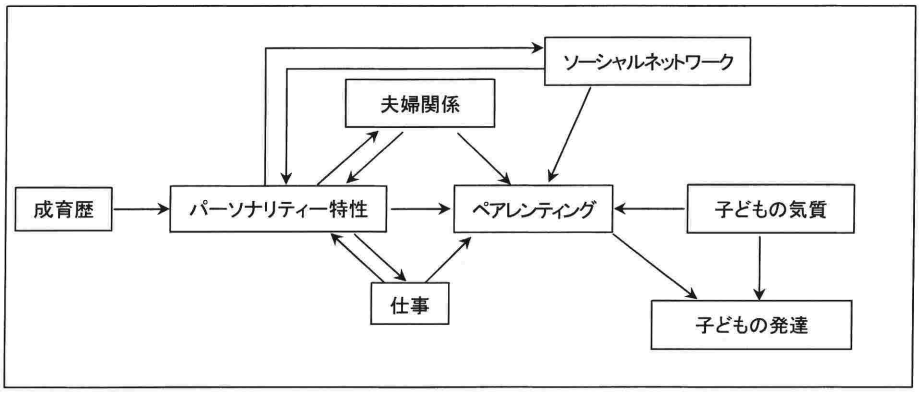

図1　ペアレンティングの規定因子に関するプロセスモデル（Belsky, J.[6]より引用，改修）

自身の成育歴，パーソナリティー），社会的要因（夫婦関係，仕事，ソーシャルネットワーク），子どもの特徴の3要因としている（図 1）．つまり，ペアレンティングは，生育歴を含め，現在までに形成されたパーソナリティーと，パーソナリティーによって特徴づけられる養育対象・社会との関係性で規定されると言える．よって，子どもが養育対象として認知され始める胎児期から，人が親となる過程を研究することが必要であると考えられる．また，Grossmann[7]はパーソナリティー特性の中でも「親和性」と「自律性」を健康な親となるために必要な特性と述べている．子育てで必要とされる「親和性」とは，子どもをかわいいと感じ，子どもに慈しみや思いやりの気持ちを持つことであり，「自律性」とは，決断力や自己主張，精神的および経済的独立意識といった言葉で説明される概念である[5]．

養育上の問題は決して母親だけのものではない．親の研究は父母についてなされるべきである．したがって本研究は，妊娠期のペアレンティングとして，初めての子どもを妊娠中の妻とその夫の「親になる意識」，および妊娠期のペアレンティングの規定因子である社会的要因としての夫婦関係に着目した．本研究の目的は，第1子を妊娠中の「親になる意識」の構造を知り，夫婦および胎児との関係，さらにパーソナリティー特性が，夫婦それぞれの「親になる意識」へどのように影響しているのかを明らかにすることである．

方　法

1. 調査対象・調査手順

調査は，2000年10月に複数の産科医療機関で同時に行った．妊婦健康診査に訪れた第1子を妊娠中の初めて親になる妊婦228名に対し，説明し同意を得た後，夫用・妻用の調査紙を手渡した．回答は自宅で夫婦別々に行い小封筒に別封した後，大封筒に同封し郵送で回収する方法を用いた．調査への最終的な同意は，調査紙返送をもって確認できたものとした．回収された113組（47.7%）は，夫も初めて親になるものであったため，これら全組が分析の対象となった．

2. 調査内容

対象の属性として，年齢，妊娠週数，胎動の有無を調査した．「親となる意識」については，小野寺らの父親になる意識の先行研究[5]を参考に，因子負荷量の小さい1項目を除き，主語を夫婦のどちらにも対応させた19項目を質問項目とした．パーソナリティー特性についても小野寺らに準じ「自律性」と「親和性」を評価した．さらに，夫婦関係の評価指標としては，Belsky[8]を参考に「夫婦間のコミュニケーション」を，胎児との関係の評価指標は，著者らが独自に作成した「胎児への関心」，「胎児存在の実感」，「胎児への関わり」に関する質問項目を用いた（表 1）．

属性を除く全ての回答には，「全くそうである」6点から「全くそうでない」1点までの6段階の評定尺度を用いた．

3. データの処理

データ解析には，SPSS 10.0J（SPSS社）統計ソフトを用いた．「親になる意識」の構造を確認

Presented by Medical*Online

表 1　調査内容

評価要素	評価指標	質問項目
パーソナリティー特性	自律性	将来の見通しを立て行動する 経済的にも精神的にも親から自立している 決断力がある 周りの人と意見が違っていても自分の意見を主張できる
	親和性	人の面倒を見るのが好きである 相手の話にすぐ共感できる 思いやりがある 誰とでもすぐ親しくなれる
夫婦関係	夫婦間のコミュニケーション	私たちは，自分の感情が素直に出せる関係である 夫/妻は，私の話を聞く態度を示してくれる 夫/妻は，私の話を理解してくれる 夫/妻は，私の気持ちをくんでくれる 私たちには，共通の私や興味がありそれについて話せる どんなことでも話し合える関係である
胎児との関係	胎児への関心	生活の中で，いつも赤ちゃんのことを気にかけている 行動するときは，赤ちゃんのことを意識して行動している
	胎児存在の実感	つわりによってお腹に赤ちゃんがいることを実感した 胎動で，赤ちゃんの存在を実感する お腹が大きくなることで，赤ちゃんの存在を実感する
	胎児への関わり	よく声を出して赤ちゃんに話しかける 赤ちゃんに触れるつもりで，よくお腹に手を当てる

するために因子分析を行い，因子尺度値の夫婦間の比較には分散分析を用いた．配偶者および胎児との関係の要因間の関連の検討には相関分析を，親になる意識への要因の関連を明らかにするためには重回帰分析を用いた．なお，胎動の有無は分析結果に影響しなかったため，妊娠時期による分析は不要とした．

結　果

1. 対象の属性

夫の平均年齢は29.7±5.5歳(mean±SD)，妻(妊婦）の平均年齢は28.0±4.8歳（mean±SD）で，平均妊娠週数は28.6±8.1週(mean±SD）であった．

2. 親になる意識の構造（表 2）

親になる意識の調査項目に関して，同一の次元で夫・妻間比較を行うために，夫婦全体のデータを用いて因子分析（最小二乗法，プロマックス回転）を行った．その結果，4因子が抽出された．第1因子は，「自分は親に向いている」，「良い親になれる」，「親になるという実感がある」，「子どもが生まれることによって一人前になれる」など，親としての自信や人としての自信が読みとれるので，本因子を＜自信＞と命名した．第2因子は，「家事を負担に思うことがある」，「経済

Presented by Medical*Online

表 2　「親になる意識」の構造（因子分析：最小二乗法，プロマックス回転）

項目	F1	F2	F3	F4	共通性
＜第1因子：自信＞					
自分は親に向いている	**.827**	−.086	−.255	−.010	.590
良い親になれると思う	**.816**	−.054	−.127	−.113	.626
親になるという実感がある	**.576**	−.053	.167	.200	.522
親になる心の準備ができている	**.563**	−.121	.063	−.014	.405
子どもが生まれることによって一人前になれると思う	**.524**	.175	.215	−.011	.391
子どもは自分の分身だと思う	**.344**	.274	.302	−.017	.292
＜第2因子：制約・負担＞					
家事を負担に思うことがある	−.249	**.564**	.046	−.050	.416
経済的にも精神的にも一家を支えていくのは負担である	−.040	**.553**	−.172	−.069	.383
子どもには自分の果たせなかった夢をかなえさせたい	.287	**.522**	−.074	−.082	.265
子どもが生まれると経済的に生活が苦しくなる	−.032	**.456**	−.225	.058	.331
子どもの世話（授乳・風呂など）が心配	−.035	**.445**	.187	.128	.259
妊娠によって自分の行動が制限されている	−.117	**.411**	−.220	.047	.327
＜第3因子：喜び・期待＞					
自分と血のつながった子供が生まれるのが嬉しい	.163	−.042	**.564**	.067	.462
子どもが生まれると家が狭くなり困る	.271	.134	**−.558**	.072	.275
生まれてくる子どものことを考えると嬉しくてたまらない	.188	.023	**.535**	.026	.413
これまでの二人だけの生活が壊され残念である	.015	.169	**−.510**	.097	.318
親になることによって人間的に成長できると思う	.297	.048	**.318**	−.066	.257
＜第4因子：子の健康不安＞					
子どもが病弱だったらどうしようかと不安である	.011	.022	−.064	**.820**	.667
生まれてくる子どもが五体満足か気がかりである	−.053	−.047	−.053	**.681**	.437
固有値	4.602	2.289	1.721	1.295	
累積説明率(%)	21.2	30.2	36.3	40.2	
因子間相関（r＝）	F1	−.248	.457	.003	
	F2		−.215	.294	
	F3			.195	

的にも精神的にも一家を支えていくのは負担である」，「子どもが生まれると経済的に苦しくなる」，「妊娠によって自分の行動が制限されている」など，子どもを持つことの制約感や負担感が読みとれるので，＜制約・負担＞と命名した．第3因子は，「自分と血のつながった子どもが生まれるのが嬉しい」，「生まれてくる子どものことを考えると嬉しくてたまらない」，「親になることによって人間的に成長できると思う」の3項目が正の負荷量で，子どもの誕生を心待ちにしている気持ちが読みとれ，「子どもが生まれると家が狭くなり困る」，「これまでの二人だけの生活が壊され残念である」は，負の負荷量で，親になると生活が悪化するということを否定していることから，＜喜び・期待＞と命名した．第4因子は，「子どもが病弱だったらどうしようかと不安である」，「生まれてくること子どもが五体満足か気がかりである」からなり，＜子の健康不安＞と命名した．

3. 親になる意識の因子尺度値の夫・妻比較（表3）

Presented by Medical*Online

表 3　「親になる意識」の因子尺度値の夫・妻比較（m±SD）

	自信	制約・負担	喜び・期待	子の健康不安
夫	3.51±.75	2.13±.91	4.21±.68	4.02±1.01
妻	3.05±.73 ***	2.48±.70 **	4.20±.58	4.13±.86

***p<.001 **p<.01

表 4　夫婦および胎児との関係とパーソナリティー特性の夫・妻比較（m±SD）

	夫婦関係	胎児との関係			パーソナリティー特性	
	コミュニケーション	胎児への関心	胎児存在の実感	胎児への関わり	自律性	親和性
夫	23.83±4.16	4.11±.83	4.09±.87	3.59±1.02	13.14±2.57	12.81±2.78
妻	23.57±4.64	4.23±.78	4.30±.70	3.85±.84 *	11.71±2.44 ***	12.56±2.20

***p<.001　*p<.05

親になる意識の各因子について，因子内全項目の得点を加算し項目数で除した尺度値を求め，分散分析を用いて夫婦間の平均値を比較した．第1因子の<自信>は夫の得点が有意に高く，第2因子の<制約・負担>は妻の得点が高かった．第3因子の<喜び・期待>，第4因子の<子の健康不安>には，夫婦間で差はみられなかった．

4. 夫婦関係および胎児との関係とパーソナリティー特性の夫・妻比較（表 4）

配偶者との関係の指標として，夫婦間のコミュニケーション（以下，「コミュニケーション」）を測定したが，これには夫婦間で差はみられなかった．また，胎児との関係指標としては，「胎児への関心」，「胎児存在の実感」，「胎児への関わり」を測定した．その結果，妻の「胎児への関わり」得点が夫より有意に高いことが明らかになった．パーソナリティー特性では，夫の「自律性」得点が妻より高く，「親和性」は差がみられなかった．

5. 夫・妻における夫婦関係および胎児との関係とパーソナリティー特性の相関関係（表 5）

夫では，「コミュニケーション」と他の全ての要因との間に相関がみられ，特に「胎児への関心」，「胎児への関わり」，「自律性」に強い相関がみられた．また，「胎児への関心」，「胎児存在の実感」，「胎児への関わり」には相互の相関関係がみられた．さらに，「自律性」と「親和性」は，「胎児存在の実感」以外の全ての項目と相関があり，特に「自律性」は「コミュニケーション」，「胎児への関心」，「胎児への関わり」とに強い相関がみられた．

一方，妻では，「コミュニケーション」と「胎児への関わり」に強い相関があり，「コミュニケーション」は，「自律性」とも相関がみられた．また，「胎児への関心」，「胎児存在の実感」，「胎児への関わり」は相互の相関関係があったが，特に「胎児への関心」が「胎児存在の実感」，「胎児への関わり」と強い相関がみられた．

6. 夫・妻における親になる意識を説明する要因（表 6,7）

親になる意識の各因子を従属変数とし，夫婦および胎児との関係，パーソナリティー特性を独立変数とするステップワイズ法による重回帰分析を行った．夫では，<自信>は「親和性」と「胎児存在の実感」によって説明され，<制約・負担>は「自律性」によって説明された．また，<喜び・期待>は「胎児への関心」，「親和性」で説明

Presented by Medical*Online

表 5　夫・妻における夫婦および胎児との関係とパーソナリティー特性の相関関係

夫

	胎児への関心	胎児存在の実感	胎児への関わり	自律性	親和性
コミュニケーション	.427 ***	.254 *	.437 ***	.330 ***	.253 **
胎児への関心	—	.447 ***	.528 ***	.496 ***	.354 ***
胎児存在の実感	—	—	.281 **	.041	.180
胎児への関わり	—	—	—	.388 ***	.276 **
自律性	—	—	—	—	

妻

	胎児への関心	胎児存在の実感	胎児への関わり	自律性	親和性
コミュニケーション	.120	−.041	.305 ***	.226 *	.166
胎児への関心	—	.411 ***	.622 ***	.075	.060
胎児存在の実感	—	—	.214 *	.069	−.025
胎児への関わり	—	—	—	.124	.172
自律性	—	—	—	—	.416 ***

***p<. 001 **p<.01 *p<.05

表 6　夫における「親になる意識」を説明する要因

従属変数	R^2	F値	独立変数	偏相関係数
自信	.232	13.77 ***	親和性	.332 **
			胎児存在の実感	.330 **
制約・負担	.133	14.29 ***	自律性	−.365 ***
喜び・期待	.297	17.79 ***	胎児への関心	.355 ***
			親和性	.302 **
子の健康不安	.210	12.24 ***	胎児存在の実感	.440 ***
			親和性	−.240 ***

***p<.001　**p<.01

され，<子の健康不安>は「胎児存在の実感」と「親和性」によって説明された（表 6）.

一方，妻では，<自信>は「胎児存在の実感」，「親和性」，「胎児への関わり」，「自律性」によって説明され，<制約・負担>は「コミュニケーション」と「親和性」で説明された．<喜び・期待>は「胎児への関わり」で説明され，<子の健康不安>は「コミュニケーション」と「胎児

Presented by Medical*Online

表 7　妻における「親になる意識」を説明する要因

従属変数	R^2	F値	独立変数	偏相関係数
自信	.363	12.81 ***	胎児存在の実感	.399 ***
			親和性	.252 *
			胎児への関わり	.257 *
			自律性	.211 *
制約・負担	.145	7.82 ***	コミュニケーション	−.336 ***
			親和性	.253 *
喜び・期待	.042	4.12 *	胎児への関わり	.206 *
子の健康不安	.109	5.70 **	コミュニケーション	−.257 **
			胎児への関わり	.217 *

***p<.001 **p<.01 *p<.05

への関わり」で説明された（表 7）.

考　察

今回の研究目的である「親になる意識」の構造は4因子で構成されていた．第 1 因子の＜自信＞と第 3 因子の＜喜び・期待＞には正の相関がみられ，共に「親になる意識」の肯定的側面を捉えていると考えられた．第2因子の＜制約・負担＞と第4因子の＜子の健康不安＞との相関はみられなかったが，「親になる意識」の否定的側面と捉えられる．したがって，親になることは，肯定・否定の相反する要素を持つことが示唆された．

夫と妻の比較では，夫は妻に比べ＜自信＞が高く，親になる自信を強く抱いていると言える．また，妻は夫に比べ＜制約・負担＞が高いことから，親になることは制約を受けることであり負担であると認知している．これは，妻が実際に妊娠・出産を体験する立場であり，生理的変化を請け負い，生活上の制約を実際に受けることの影響であると考えられる．概して，「親になる意識」は，夫は妻より楽天的，妻は夫より現実的と言えよう．

「胎児との関係」において夫は，実際に妊娠を体験しないにもかかわらず，子どもへの関心は妻と差がなく，妻だけでなく夫も生まれてくる子どもの存在を実感していることがわかる．妻において，「胎児への関わり」が夫より高いのは，胎内に胎児が存在することによって関わる機会が保証されているから当然のことと考えられた．

パーソナリティー特性について，「自律性」は従来の男性性の特質としての独立や自立といった価値であり，「親和性」は，従来の女性性の特質である愛情や優しさといった価値を表す概念であり，また，高い自律性と親和性は，アンドロジニー的な成熟したパーソナリティー特性と捉えられている概念でもある[9]．Grossmannは男性の方が女性に比べて「自律性」に優れていることを述べている[7]．本調査では，夫の方が「自律性」が高く，「親和性」には差を認めなかった．第 1 子を妊娠中の初めて親になる夫婦では，パーソナリティー特性の自己認知においても，夫は妻より自信があり楽観的であると示唆された．

一方，夫婦関係および胎児との関係とパーソナリティー特性の要因間の相関関係をみると，夫では成熟したパーソナリティー特性を持つことと，夫婦および胎児との関係の良さが相互に好影響を及ぼし合っていた．また，夫では胎児への関心が深まることで，より胎児へかかわるようになり，かかわることでさらに胎児存在の実感を強めている状況がうかがえた．妻では自律的なパーソナリティー特性をもつ者ほど夫婦関係が良好であり，さらに夫婦関係が良好であるほど胎児との関係も良好であった．つまり，夫ではパーソナリティー

Presented by Medical*Online

も夫婦および胎児との関係も全てが相互作用し合うが，妻では夫婦関係が鍵となることが示唆された．いずれにしろ，夫と妻の両方が成熟したパーソナリティーを持つことが重要であり，成熟したパーソナリティー特性は，夫婦および胎児との関係に好影響を及ぼすと考えられた．

近年の日本の青年期男女について，自己中心性の高さや親依存の育児意識が指摘されている[10]．人格的に未成熟な者が夫婦になり親となることは，夫婦および胎児との関係，さらには親となる意識にも悪影響を及ぼすことが危惧される．したがって，人格的に未熟な者も親になることを理解した上で，母子関係のみでなく，夫も含めた家族全体を視野に入れた養育支援を行うことが求められている．

親になる意識の4因子を説明する要因を重回帰分析によって抽出したところ，夫と妻では，それぞれ異なることが明らかとなった．要因間の相関の結果を考慮すると，夫では夫婦および胎児との関係とパーソナリティー特性はそれぞれが相互に関連しながら，特に「親和性」と「胎児存在の実感」，「自律性」，「胎児への関心」が親となる意識の形成に寄与しているといえる．つまり，夫においては成熟した人格，子どもへの強い関心と存在の実感が親となる意識の形成に肯定的に関与するものと考えられた．

一方，妻では夫婦関係の良さは親になる意識の否定的側面を軽減していた．また，胎児への関わりと胎児存在の実感は親となる意識の肯定的側面を強化すると同時に，否定的側面の子の健康不安も強めることがわかった．しかも妻では，妻自身が自律的なパーソナリティーを持っているかどうかということが，夫婦関係および胎児との関係に影響していた．

本研究では，初めて親になる夫婦を対象とし親となる意識を分析したが，第2子，第3子をもつ夫婦では家族関係が複雑になることから，今回の結果と異なることも予想され，今後更なる検討が必要である．

結　語

本研究では，初めて親になる夫婦の妊娠中の「親となる意識」について，妻のみならず夫についても別々に分析するとともに，それらの相互関係について検討を加えた．

「親となる意識」は，＜自信＞，＜制約・負担＞，＜喜び・期待＞，＜子の健康不安＞の肯定・否定的4因子から構成されていた．夫婦および胎児との関係において，夫は「胎児への関心」と「胎児存在の実感」を妻と同程度感じていた．また夫では，成熟したパーソナリティー特性と夫婦関係および「胎児への関心」，「胎児への関わり」は相互に関連し，「胎児存在の実感」を強化していた．一方，妻では妻自身がパーソナリティー特性として「自律性」を備えていることと夫婦関係が良好であることが関連し，加えて夫婦関係が良好であることと胎児との関係が良好であることが関連していた．さらに，「親となる意識」への夫婦および胎児との関係の影響に関しては，夫では成熟したパーソナリティーは「親となる意識」の否定的側面を軽減し，成熟したパーソナリティーと良好な胎児との関係が「親となる意識」の肯定的側面を強化していた．妻では良好な夫婦関係が「親となる意識」の否定的側面を緩和していた．夫婦に共通して，成熟したパーソナリティーは夫婦および胎児との関係に好影響を及ぼし，親となる意識に肯定的に寄与していた．

今回得られた結果から，親になる過程は夫と妻では異なることが明らかとなった．看護援助においては，家族看護の視点から，妊娠期からの夫と妻の心理的支援の必要性が示唆された．医療従事者は，自律性や親和性が未成熟な対象に関しても，妊娠期から継続した親となる過程の発達支援を提供すること，妊婦と胎児だけに注目するのではなく，それを支える役割を持つ夫（父親）にも目を向け，妊婦健康診査などの場において積極的に家族介入することが重要であると考えられた．

本研究をまとめるにあたり，ご協力頂きました第1子を妊娠中のご夫妻に感謝致します．

文　献

1) 大日向雅美．（1999）子育てと出会うとき．pp. 12-46, NHKBOOKS, 東京．
2) 新谷由里子，松村幹子，牧野暢男．（1993）親の変化とその規定因に関する一研究．家庭教育研究所紀要 **15**, 129-140.
3) 柏木惠子，若松素子．（1994）「親となる」ことによる人格発達：生涯発達的視点から親

Presented by Medical*Online

を研究する試み．発達心理学研究 **1**, 72–83.

4) 日隈ふみ子，藤原千恵子，石井京子．(1999) 親としての発達に関する研究－1歳半児を持つ父親の育児家事行動の観点から－．日本助産学会誌 **12**, 56–53.

5) 小野寺敦子，青木紀久代，小山真弓．(1998) 父親になる意識の形成過程．発達心理学研究 **9**, 121–130.

6) Belsky, J. (1984) The determinants of parenting : A process model. Child Development **55**, 83–96.

7) Grossmann, F, K. Pollack, W. S., & Golding, E. (1988) Fathers and children : Predicting the quality and quantity of fathering. Development Psychology **24**, 82–91.

8) Belsky, J. and Kelly, J. 安次嶺佳子訳．(1995) 子どもを持つと夫婦に何が起こるか．草思社，東京.

9) 渡邊恵子．(1998) 女性・男性の発達．柏木恵子編　結婚・家族の心理学．pp 233–292. ミネルヴァ書房，京都.

10) 吉田真弓，尾形奈美，大塚由希．(2000) 青年期男女の育児意識に関する日米比較研究 (1)．日本心理学会第64回会議録，pp 1063.

Presented by Medical*Online